

カナダ・アメリカを旅して

－生活の中の木・樹－

北海道立寒地住宅都市研究所居住科学部 松村博文

はじめに

1988年12月初旬からクリスマスにかけて、カナダとアメリカ合衆国を約3週間旅をして巡りました。巡った都市はバンクーバー・オタワ・エドモントン・ボストン・ニューヨークの5都市です。今回の旅では、その土地に住む人々の普通の生活に触れたかったので、各都市の住宅地を足で歩いて回りました。

この季節はクリスマスを除いて比較的観光客が少ないようで、リラックスして見て回ることができました。

この旅で、その土地土地の“生活の中の木・樹”について感じたことを気ままにつづってみました。

なお、ここでの“生活の中で”とは、“生活に溶け込んだ”、“うそっぽくない”、“時間の流れを感じさせる”というような意味を含んでいます。

住宅に対する考え方

欧米では日本に比べ住宅のストックが充実しており、収入や家族構成の変化に伴って比較的気軽に住替えをしているようです。

オタワで国立建設研究所に勤める40代の人の住宅を見せてもらいました。この住宅はそれまでの中古住宅から2年前に新築したもので、総地下室付2階建の建物が閑静な住宅地に建っています。この住宅の内部を見て印象的だったのは、地下室の内装の一部がコンクリートを打ち放したままになっており、尋ねてみると「地下室の仕上げは費



写真1 内装を自分の手で行った地下室（オタワ）

用が足りなかったので徐々に自分でやることにした。」とのことでした（写真1）。自分の住宅の内装や外構部分を自らの手で仕上げたり、メンテナンスしたりするのは一般的に行われているようです。このようなことができるのは、それをするだけの“時間のゆとり”があることはもちろんですが、住宅を自分のものとして気持ち良く住まえるようにしようという“心のゆとり”があるからなのでしょう。

このようなゆとりのある住まい手にとって、“木”という素材はたいへん魅力的なものだと思われれます。それは、“木”が素人でも加工がしやすく、メンテナンスも手間さえ惜しまなければ簡単にでき、そうすれば時間とともに美しくなる可能性を持った素材だからです。

日本の多くの人々は時間にも心にもゆとりがないために、メンテナンスフリーを尊び、そういう工業製品を利用しがちです。そうした住宅の多くは、新築時が最も美しく、その後は朽ちていくも

のです。

建材としての“木”は、メンテナンスによって美しさを保つだけではなく、時間の流れをもそこに刻み込むことができることに、その自然素材としての大きな価値があるのです。住宅に関する材料は、たとえ機能的な面でのメンテナンスフリーは可能でも、時間の流れを美しく刻み込むという面では、メンテナンスは絶対必要だと思われま

す。また、塗装などのメンテナンスを行うことによって、各家庭の個性を表現することもできるので

す。欧米を旅していると美しい街並みを見ることができ

街並みと住宅の敷地・庭

1) 敷地の私的・公的性

カナダ・アメリカの住宅地を歩いて改めて驚いたのはその敷地の広さです。

戸建住宅の敷地の広さは、国土の広さや地価の問題などから日本と欧米で格段の差があるのは周知のことですが、広さ以外にも自分の敷地に対する考え方は随分差があるようです。

図1はA. ラポポートによる戸建住宅周りの公的・私的領域の模式図です。日本では土地の個人に対する帰属性が高く、敷地全てを私的領域と認識さ

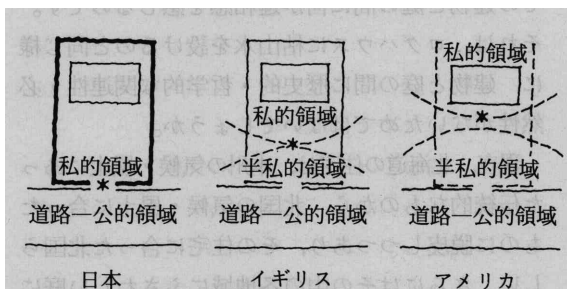


図1 3つの国における「私」と「公」の境目
(延藤安弘ほか 計画的集団開発 学芸出版社)

れ、敷地境界に高い塀を築いたりしますが(写真2)、イギリスやアメリカでは道路側建物前面の敷地を半私的な領域ととらえオープンローン(写真3)や低い垣根(写真4)などにして公的領域である道路と接する例が多いというものです。オープンローンや低い垣根ですと道行く人の目に庭が飛び込み視覚的に広さを与えるとともに、美しい街並みをつくる可能性を大きくします。

今回の旅行は12月ということで、街はクリスマス



写真2 1.5mのへいに囲まれた住宅(石狩町花川)



写真3 オープンローン(バンクーバー)



写真4 低いへいを持つ住宅(バンクーバー)



写真5 庭の樹々に飾りつけられた電球 (エドモントン)



写真7 庭に立つ針葉樹(2) (オタワ)



写真6 庭に立つ針葉樹(1) (バンクーバー)



写真8 北海道における住宅と庭

スに染まっていました。住宅地では多くの家庭が玄関にクリスマスツリーを飾り、道路側建物前面の樹々にたくさんの豆電球を飾り付けていました(写真5)。これも敷地や建物を公的なものとしてとらえている現われの一つではないでしょうか。

北海道の場合、その地理的条件と歴史性などにより、他の日本の地域とは敷地の条件や考え方に異なった面を持っているようです。それは土地に対する執着がそれほど強くなく、塀が少ないなどということに現われています。このことは、北海道において、道路側の敷地を半私有地として街並みに参加させて美しい景観を持った住宅地をつくりだす可能性を示していると思われる。

2) 庭と地域性

カナダで、戸建住宅の広い芝生だけの庭に、かなり背の高い常緑の針葉樹が1~2本シンポリックに立っているのをよく見かけました(写真6, 7)。地元にいる日本人に聞いた話では、その樹は、たいいてい住宅建設時に植えたもので、樹の高

さをみればその住宅の古さがわかるということでした。庭の樹がその住宅の歴史を漂わせるとはなかなか感動的です。

欧米の庭と日本の伝統的な庭とは、その形態や考え方もかなり異なります。北海道において、建物のデザインは、いわゆる洋風化していますが、庭に関しては以前とあまり変わらず、雑然と花と樹が植えられていたり、なんとなく和風だったりします(写真8)。その是非はともかくとして、その建物と庭の間に何か違和感を感じるのです。それは、ログハウスに枯山水を設けるのと同じ様に、建物と庭の間に歴史的・哲学的な関連性・必然性がないためではないでしょうか。

現在、北海道の住宅は、本州の気候・風土にあった伝統的なものから、北国の気候・風土に合ったものに脱皮しつつあり、その住宅に合った北国らしい、さらにはその中の各地域にふさわしい庭についても考えなければなりません。その考えるポイントとして次のようなことがあるように思われ

ます。

外の居間としての庭

現在の庭のはほとんどは、洗濯干しのスペース以外は、菜園としたり、“見るための庭”になっていますが、庭を外の居間と見立ててそこで食事をしたり、昼寝をしたりできる“使える庭”にします。それは、ある程度の面積の芝生や木デッキを設けるなど、建築的なちょっとした工夫をするだけで可能になります。

街並み形成要素としての庭

庭は個人のものであるという考え方を一歩前進させ、庭に公共的な役割を担ってもらい、美しい街なみを形成する一助とします。そのためには、高い塀は避け、その材質をそろえるなどして街並みに統一感を出すようにします。

地域性を表現する庭

各地域に馴染みの深い樹種を選定し植えるなど、庭に地域独自の工夫をすることによって、地域の個性を表現します。全道どこへいっても同じ庭木（例えばイチイ（オンコ））ではつまらない気がします。

生活の中の木製品

今回の旅行で、街や住宅地で見かけた木製品を紹介します。

1) 塀

住宅地で、たくさんの木製の塀を見ることができました。そのほとんどは、公共的な道路に対しては低いもので、シンプルなデザインで、しかもメンテナンスが行き届いたものでした（写真9～11）。

2) ベンチ

ちょっとした広場や公園には必ずといっていい程ベンチが置かれており、その多くは木製でした。木製といっても、座面が木で、脚などの構造体は、金属やコンクリートなどを使ったものが多く見られました。全てが木である必要はなく、人間に触れる部分が木であれば良いのです。（写真12～16）。

3) パーゴラ



写真9 住宅地のへい(オタワ)

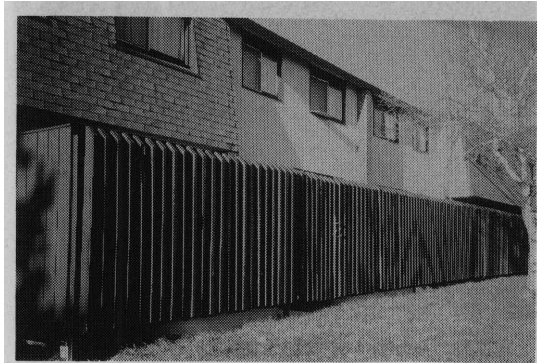


写真10 住宅のへい(オタワ)

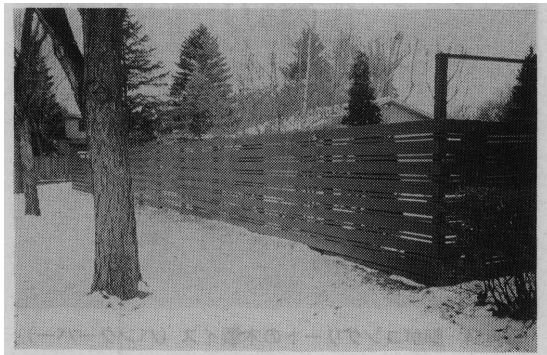


写真11 住宅地のへい(オタワ)

日本でも最近よくみられますが、写真17のパーゴラはかなり大規模なものでコンクリート柱の上に木の直材でアーチが構成されています。

4) 木デッキ

木デッキはその弾性特性により歩行感がよく、無機質な素材に囲まれた都会においては、人を集めることのできる魅力的な空間を創り出します（写真18～20）。



写真12 脚が鉄の木製ベンチ(ボストン)



写真16 脚がコンクリートの木製イス(MIT)



写真13 脚が鉄パイプの木製イス(バンクーバー)

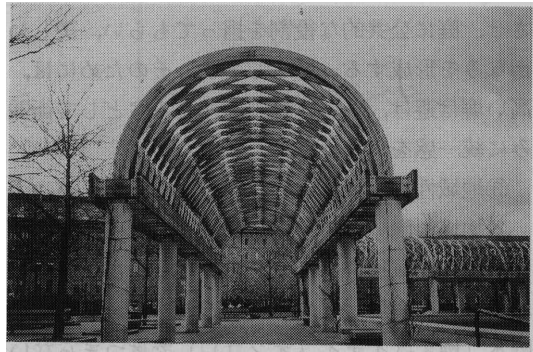


写真17 木製パーゴラ(ボストン)

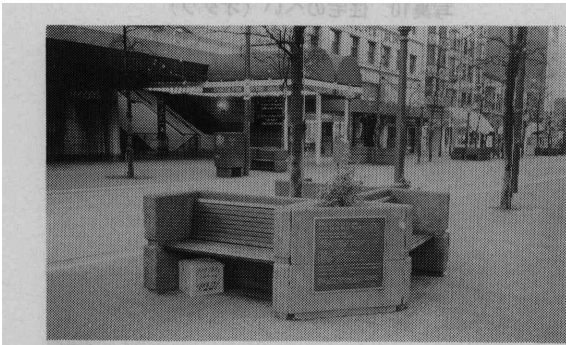


写真14 脚がコンクリートの木製イス(バンクーバー)



写真15 木製イス

おわりに

現在、日本では、“木”をめぐる状況がかなり変化している様に思われます。高度成長期以来、駆逐された感のあった“木”も、現在では、その様々な良さが広く認識されるようになっていきます。

しかし、“木が良いのはわかるが使えない”という声をよく聞きます。それは、

木製品が他の工業製品に比べて、表面上価格が高いと思われている。

メンテナンスに対して不安を持っている。

材料としての“木”が身近な存在として供給されていない。

などの原因があるためと思われます。

今後、時間にもお金にもゆとりができてくる状況の下で、“木”に対する潜在的需要は、ますます増えてくると思われますが、その需要を活かすために“木”の供給側がやらなければならないことがいくつかあるように思われます。それは、



写真18 海辺の商業施設の木デッキ（バンクーバー）



写真20 港の木の床（ニューヨーク）



写真19 商業施設へのアプローチ木デッキ
（バンクーバー）

“木”の特性を上手に利用し、優れたデザインを提供する。そのためには設計者が持っている“木”に関する様々な誤解を解いていく必要があります。

“木”にメンテナンスが必要なことを、もっ

と積極的にユーザーに知らせる。時間や心にゆとりがない時代にはマイナスであったメンテナンスも、現在ではユーザーの個性を表現できるという点でむしろプラスであり、ユーザーが気軽に楽しみながらメンテナンスできるように供給側がサービスする必要があります。

一般の人が自分で加工制作できるように、欲しい“木”の材料を少量でも安価で簡単に入手できるようにする。現在あるDIYショップの木材の価格では高すぎて、“木”が身近な素材として普及しないのではないのでしょうか。

そして、“木”の技術者を養成し、一般の人にもその技術を普及していく必要があると思われます。

今回の旅を通して、カナダ・アメリカの人々にとって“木”は極めて身近な存在であることがわかりました。そこには木材が安価であるとともに生活を楽しむ“ゆとり”が基本にあるようです。日本人は物質的には豊かなようですが“心のゆとり”がないことを痛感しました。